

静脩

1998年10月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 35, No. 2

『百万塔陀羅尼』の語るところ

人文科学研究所教授 勝村哲也

人は何千年もの間、ものを書いてきた。その書写の材料として、人が考えついたのは、粘土や石や木や金属に刻むための莖(くき)や篋(へら)や刀や鑿(のみ)と、竹や木や絹や紙に書くための筆やペンであった。このように書写という行為は、「刻む」と「書く」のふたつに限られていたのである。「刺す」つまり刺繍もあるが、例外に属する。

「刻む」というのは、書写対象となるモノに点と線を刻む行為であって、金属に刻む活字や紙に刻む紙型(しけい)あるいは点字の形態をとって現在でもまだ行われている。タイプライターも同類で、キーのヘッドに鑄込まれた活字を叩いて紙に字を書く。

「書く」のは、墨や顔料を含む広義のインクの使用によって普及したのであって、今日では書くといえば、普通はこの行為を意味する。もっとも角筆とよばれるペンによって、インクを用いずに紙に書くとか、棒切で砂に書く方法もあるが、これはむしろ刻むに近い。

ところが、20年あまり前に、コンピュータやワープロによってものを書くことが始まった。電子の字、いわゆる電字の登場である。書写対象となるモノは、見かけからいえばディスプレイ上にあるが、媒体とよばれる磁気テープ、フロッピーディスク、光磁気ディスクといった

人工的に作り出された新物質に写し取って、紙に転写することもできる。コンピュータで書写される媒体は、モノとして存在するので、何となく理解できるとしても、その



モノの上にどのようにして電字を書くのかの説明は、何しろ目に見えない電子が相手なので、なかなかやっかいである。ごく簡単にいうと、電字というのは、一つ一つ固有の概念(もっとも基本的なのは形)が与えられた文字を、記号と数式で構成し、コンピュータ可読とした文字のことである。この電字を使って、私達はどのような文献でも書けるようになった。漢字も例外ではない。人文科学研究所の私のホームページから公開している「ekanji」は、いわば電子漢字の活字棚で、まだ型(フォントタイプ)は限られているが、字種は6万5000、来年の今頃までには8万7000まで収容しているはずである。「ekanji」利用者の仕事は、文選と植字を、電子漢字の活字棚を使ってパソコン上で行うこと

だといえ、より分りやすいであろう。

いま、コンピュータで文字を書くための研究と、電子漢字利用のための国際的な環境づくりに専念している私が、思考の回路を千年の昔にあわせ、イメージーションをたくましくして文字の世界に遊ぶとき、想起するのは、少し歪な形をした附属図書館蔵の『百万塔陀羅尼』の姿である。

突拍子もないと思われるのを承知の上で、話を進めると、わが国最古の印刷物といわれる『百万塔陀羅尼』の製作過程を、最新の技術を援用して解こうとするとき、この眼前にある附属図書館蔵の陀羅尼は、私の想像力をいたく刺激し、藪内清、藤枝晃両名誉教授がお採りになる木版印刷説を否定する方向へと、誘導するのである。

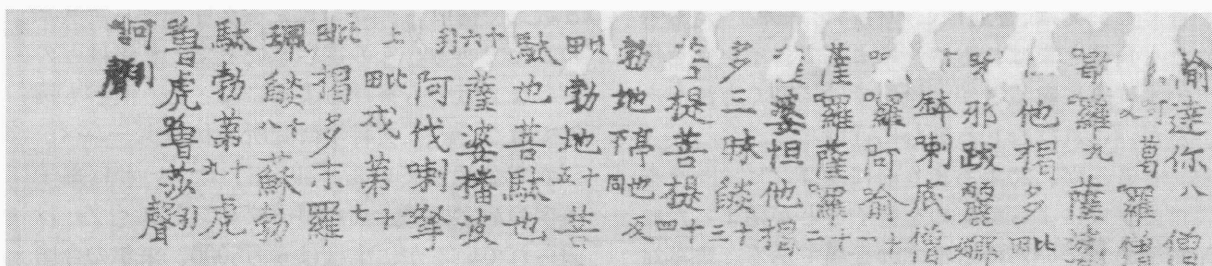
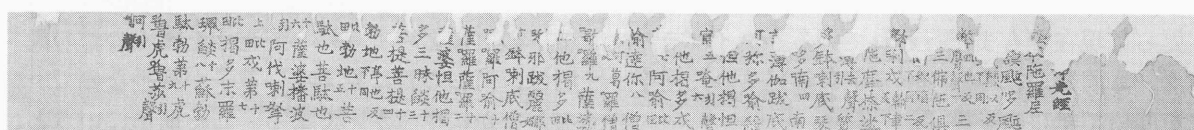
版の上に紙をあてて刷るのを印刷(プリント)、紙の上に版を押しあてての捺印(スタンプ)というが、附属図書館蔵の陀羅尼(根本陀羅尼經、短)は、本文にあたる經文の丁度半分のところで二段に割れるような歪みが生じている。写真ではよく確認できないことを恐れるが、最下段の文字のラインが少し、左肩上りになっている。このようなラインの歪みは捺印のときに顕著で、スタンプラインと称している。またよく見ると、捺印のときに生じる墨の落下跡がある。スタンプラインは、各行の文字の重心を結

ぶこと等によって計算が可能であり、小さな版は1, 2行、大きい版は7~9行、10~12行程度であることが確められそうである。墨跡は版面に陽刻された文字の中の小さな閉曲線内に墨が付けられた場合に起るとみて、その出現頻度を統計処理することによって、捺印の証明が可能である。

わが国の百万塔陀羅尼より少し古く、世界最古の木版印刷物とされる韓国出土の陀羅尼も写真で見ると捺印と判断される。そうなるのであれば、厳密な意味で最古の印刷物と言えないのだろうか。

およその見通しを述べれば、否である。天理大学図書館蔵六度陀羅尼經等に認められる版の回転によって生じた断じざるを得ない痕跡、何らかの回転によって生じたと思われる紙の上端あるいは下端の墨跡、經卷が継紙(つぎがみ)の後に捺印された事実等を突き合わせているうちに、『百万塔陀羅尼』は銅板の輪転機で印刷したのではないかという想いが湧きあがってきた。墨跡を眺めながら、それが銅板用の油を含んだインキであることをどのようにして検証するか、DNA鑑定ができればよいが、許可があるかどうか、次なる課題に頭をめぐらせているところである。

(かつむら てつや)



京都大学附属図書館蔵根本陀羅尼經(短)